

国登録有形文化財 大正ロマン香る駅舎

萩 駅 舎



山陰本線は京都市下京区の京都駅から、中国地方の日本海沿岸を經由し山口県下関市の幡生駅に至る鉄道路線です。明治 45（1912）年に京都―出雲間が開通した後、順次延伸され、昭和 8（1933）年によりやく下関まで全通しました。その途中駅となる萩駅は、大正 14（1925）年 4 月、美祢線延長の長門三隅・萩間開通にともなって建設された洋館駅です。

しかし、この駅舎も老朽化が進み、また無人駅でもあったため、平成 5（1993）年に解体の話がおきました。そこで、萩市は駅舎を無償で譲り受けて改築し、平成 10 年 4 月 17 日に「萩市自然と歴史の展示館」としてオープンさせました。

この改築では、建築当時にあった今では大変珍しいドーマー窓（洋風の民家の屋根に見られる小窓）を復元し、間取りも当時のものに近くなりました。加えて、入り口には、大正末期から昭和初期に建てられた、日本で 2 番目の型式である電話ボックスが復元されています。萩駅は白壁と縦長の大きな窓が特徴のハーフティンバー（壁面に柱や梁が露出する構造）、入口ポーチ、棟先を落とした切妻屋根等、洋風の意匠をもつ点に特徴があります。

館内は萩の四季折々の風景や、萩市出身で「日本の鉄道の父」と言われる井上勝の資料など、パネル写真やビデオなどで紹介しています。井上は 20 歳の時、伊藤博文らとともにイギリスに渡り、大学に通う傍ら駅や鉄道を視察し、一度に多くの人や荷物を運べる鉄道の必要性を痛感します。そして帰国後、彼は日本初の鉄道「新橋―横浜間」を工事責任者として開通させ、京都―大津間は日本人だけの手で完成させました。生涯を鉄道にかけた井上でしたが、明治 43（1910）年欧州鉄道視察中に倒れ、ロンドンで亡くなります。

故郷萩駅の開業を見ることは叶わなかった井上ですが、彼が最初に手掛けた旧新橋停車場のプラットホームに使われていた敷石が、現在萩の駅舎を囲む花壇の縁石になっていることを、さぞや喜ぶのではと思ってしまう。

■位置図



現役の萩駅の改札口
旧萩駅駅舎の向かって左側にある、小スペースの萩駅。



ホーム
上り、下りあわせて 1 日 16 本の列車が走っている。



旧萩駅舎（自然と歴史の展示館）
駅舎内部は、2 等（現在のグリーン席）待合室と、一般待合室とに分けられていた。写真の人物は鉄道の父井上勝である。



国登録有形文化財「旧萩駅舎」
大正 14（1925）年建築の萩駅は今も現役の駅舎である。駅入り口の電話ボックスは、大正期から昭和初期に建てられたものを復元している。